



本人右端

# 指輪より書齋？

文  
写真 和田 英理子 (学校教育研究科)  
(Wada, Eriko)

ある日、デイズニー映画「美女と野獣」を見た友人が私に次のように言いました。「きつと、あなたも指輪より書齋のタイプよね」。詳しく聞くと、主人公のベルに野獣が贈ったプレゼントが書齋だったというのです。それを聞いて、友人の指摘の正しさに思わず笑ってしまいました。

私は小さい頃から本好きで、誕生日やクリスマスといったプレゼントをもらえそうなときには、おもちゃよりも「本が欲しい。書齋が欲しい」と思っていました。もちろん、子どもの頃は「書齋」という言葉を知らなかったので、「本がいつばいある部屋」と言っていました。とにかく本に囲まれた部屋で一日中本を読んでいた、それが私の夢だったので。しかし、そのような願いが、親やサントクロースに伝わるはずもなく、書齋を持つ夢は夢のままとなっていました。そして、そんな夢があったことさえ忘れていたころに、友人のきつきの一言があったわけです。

「ね、そうでしょ。プロポーズするときに指輪くれる人と書齋をあげるといふ人がいたら、どっちを選ぶのよ」。私があると答えたかなんて、もうお分かりですよね。やれやれ、外見はいくらか成長したといっても、根本的なところは変わらない。まさに三つ子の魂というやつです。満足げな友人の顔を見ながら、「本当に書齋をくれる人がいたら結婚してもいいかも」とまで思ってしまった。

こんなふうに本好きで書齋に憧れていた私にとって、はじめて図書館という存

在を知った時の喜びといったらありませんでした。小学校に入学し図書室を見たとき、「ここには自分の読んだことのない本がいっぱいある」と思うだけで、わくわくしていたのです。ちよつと埃つぽくて、インクの匂いとページをめくる音だけが響く空間。図書室に入るだけで、どんなに荒れた気分の時でもほっとしたのを覚えています。こんな私なので、中学、高校と進学するたびに、まずチェックするのは図書室でした。これは大学でも同様でした。

私は一九九一年四月に広島大学学校教育学部に入學したのですが、私たちの入學した頃は、広島市内の東千田キャンパスで一般教養の講義を受け、東雲キャンパスで専門の講義を受けていました。ですから、移転後に入學したみなさんは、大学の図書館というと西条キャンパスの東、西、中央図書館を思い描くでしょうが、私が初めて見た大学の図書館というのは、東千田、東雲の図書館なのです。そのときの印象を一言で言ううと、「古い・暗い」でした。

しかし、その古さは、入學したての私にとつては、何となく大学っぽさを感じさせ、一気に学生であることを実感させてくれました。閲覧室でドイツ語の予習をし、参考図書室で調べ物をしながら、ふと目を上げると、思い思いに勉強している人がいる。中学・高校のようながむしゃらな勉強風景ではなくて、淡々と、それでいて熱心な様子に久しぶりにほっとするものを感じたのです。それからは、勉強するためだけでなく、何となくそ

の雰囲気浸りに浸ってたくて図書館に通うようになりました。

しかし、思い入れのあったこれらの図書館は、移転と同時にずいぶん様子が変わりました。東雲キャンパスの移転に追われる九五年の三月、私は東雲の図書館を写真に収めようと友人二人と出かけました。たまたま司書の方が片づけているところで、図書館を写真に撮りたいというところ、とても喜んでくれ、シャッターを押してくれました。図書館の中はスチール製の書架がばらして積んであり、閑散とした様子でした。もともと、西条キャンパスの図書館のように空調が完備され、個室やテーブルなどの環境が整っているわけではありませんでした。しかし、壁に描かれていた絵画、傷だらけの机、机においてあったスタンドの黄色い光、そういう物の一つひとつに、離れがたいものを感じ、なくなるんだなあと思ってしまう気持ちでいっぱいになりました。

たまたま大学院に進学したので西条キャンパスの図書館も知っているものの、やはり、大学の図書館として思い出すのは、東千田や東雲のあの古い図書館なのです。書齋が欲しかった私は、図書館を自分の書齋代わりとして心の拠り所にしていました。思い出のなかの図書館を少々美化しているのかもしれませんが、やっぱりに私にとつては「指輪より書齋」です。これじゃあ当分結婚なんてできないな、と思いつながら九七年三月、修了して広島を去ります。次に出会うのはどんな書齋だろうかと思いつながら、幾つもの図書館の思い出とともに。